

福岡藩士・青柳種信（四七歳）に惚れ込む

房総郷土資料のなかに「筑紫史談」の記事として、青柳種信と忠敬のことが出てくるが、忠敬の人柄がよく出ているので紹介したい。

伊能隊の来着がきまると、地元の諸藩、村々では接遇および作業支援のため、自主的に測量経験のある地区に聞き合いの使いを出して情報を集めはじめた。

村々には一年以上前から、幕府勘定奉行からの先触れがまわった。村は伊能隊を受け入れる直接の当事者であるから、藩の指示がなくとも自発的に行動をおこす。藩の方は全てを村側にまかせ、報告を聞いてポイントだけに藩の意向を反映させることもできた。

他藩との振り合いで、使者を立て土地の名産を進物をするとか町奉行、郡奉行、浦奉行、代官などが挨拶することは、各地の藩でおこなわれたが、西国の諸藩では、領内の大庄屋たちに「うまくやれ」といつてまかせてはおけなかった。藩士を付き添い役に任命して、大庄屋たちの指導にあたらせたところが多い。

筑前の国学者として著名な福岡藩士・青柳種信は、通称を勝次といい、柳園と号した。六石三人扶持の下級武士の家に生まれたが、1782年（天明二）一七才のとき、江戸藩邸詰めを命じられて出

府。四年間江戸に住み、藩主侍読・井上南山に儒学を学んだ。

1789年（寛政元）、ふたたび江戸詰めを命ぜられると、道を伊勢路にとつて松坂の本居宣長の下に至って入門し、鈴の屋門下として江戸に着いた。在府中、賀茂真淵門下の高弟と交わる。

その頃、香取神宮、鹿島神宮にも遊んだことがあるという。以後国学の研鑽につとめ、筑前における国学の始祖となった。

1808年（文化五年）浦奉行井手勘七のもとで浦方附き頭取となる。1812年（文化九年）伊能忠敬が測量にくると、藩命により御手当附廻りを命じられ、浦方出入・山田宇平を同道し、大庄屋、庄屋など多数を召連れ、小倉境に出迎えた。

このとき、忠敬は宗像宮に参詣したが、御宮の由来の説明を求められる。また、志賀島から出土した金印についても尋ねられたので、承知していることを話したところ、ぜひ書いて欲しいといわれる。

忠敬に「帰府したら聖堂の儒者にも見せるから是非に」と頼まれる。ここまで云われたら断れない。

やむをえず、承知して奉行に報告する。草稿ができれば御用人に見せるから提出するよう命令をうける。

宗像宮略記、後漢金印略考2冊を認め提出したところ、老職も見たいので、宗像宮略記は大宮司に、後漢金印略考は侍読の儒者・竹田鶴吉、月形七助に読ませたのち許可がでる。

2冊は伊能隊が再度入境したとき、下座郡桑原村旅宿で忠敬に渡された。殊のほか喜んで「諸国を廻っているが、貴殿ほど国学に達した人に逢ったことがない。帰府の上で貴殿が格別に国学に明るいことを、内々で御老中方にも申し上げる」とお話があり恐れ入ったとある。

忠敬の測量日記には何も書いてないが、資料を入手してベタほめである。老中に申し上げるなどと、しっかり御用風を吹かしている御機嫌である。

出張先で御用風を吹かしてはいけないと、厳しく誠められていたが、いまでも車中談というのがあるように、旅先では口が軽くなる。忠敬も謹言居士ではなく、普通の人だったと思う。いかに大仕事をしていた期待されているとはいえ、老中に簡単にものがいえる身分ではない。

種信の記述は続く。今回の測量では諸国の神名帳に出ている神社は残らず絵図に書き込むとのことで、往還筋から神社までの里数、町数、由来書などを詳しく調べている。その他名所、旧跡、古書の記事なども調査しているからと、領内ばかりでなく、隣国の古祉についてもお尋ねがあったので、承知していることを答えたという。

忠敬は著名な社寺や名所・旧跡には必ず立寄っており、社寺の場合、門前まで測量して、あと境内と宝物などを拝見している。そし

て由来書、碑面などを写している。好奇心旺盛で旅の余録を楽しんでいたと考えられ、青柳の報告のようなことは充分ありうることであった。

青柳は博学で、歴史・地理的なことをよく知っていたらしく、再度の入境にも青柳が出るよう指名している。「原田駅から太宰府、宝満、を経て日田領に入る予定である。貴殿の受け持ちでないかもしれないが、出役してくれば、近国の古跡もお尋ねしたい」とのことであった。

自分には答えられないので、役人共へお話下さるようお断りしたという。「もつともだ」と忠敬は了解して、中津領境の休憩所で休息の際に、附廻りの山家代官、御右筆頭取、御境目受持分限方、御医師など付き添いの面々がお暇乞いに出たとき、忠敬から「勝次のこと、またまた領内へ入り込みのとき、私から尋ねたいことがあるので、差し出しされるよう」依頼をされる。

役人たちは藩庁に報告したので、御用人経由、奉行から種信に通告が出た。種信は原田宿に忠敬を出迎える。ここでは、忠敬らが江戸から持ってきた肥前、老岐の國絵図を借り受けて写させてもらう。他国の國絵図を写させるなど、幕命違反ではないかと思われる大サービスである。

文化一〇年、3度目の入境のときは出なかつたら、呼び出しがき

て博多で挨拶に出る。このときは、筑後志5冊、九州図などを借してもらう。藩領を去るにあたっては「中国測量にも一緒に連れてゆきたいが、事前に申請をしないので難しい。九州の地誌編纂をするときは、あなたに依頼するよう、内々で老中・若年寄りに話しておく」といつて分かれたという。

忠敬は才能ある人士を愛した。各地で応対に出た多数の人々のなかには、そういう人々がいた。徳嶋の岡崎三蔵にも高知へ連れてゆきたいと洩らしている。越中の石黒信由、天草の上田宜珍には忠敬は非常に親しく付き合っている。しかし、これほどまで丁寧に忠敬に接された人物をまだ知らない。

青柳については、最近、柳園自身の記録を入手したので、伊能忠敬研究会会報64号に紹介したが、大分以前に書いたメモをみつけたので掲載する。(2012・3・18)